

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 完了報告書

提出日：2008年 7月 1日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	相川 陽一
連絡先・所属など	Aikawa-y@brown.plala.or.jp
調査研究・研修のテーマ	支援者にとっての三里塚闘争 「動き続ける人々」の記録づくり

2. 調査研究・研修結果の概要

2007年度の助成研修では、研修計画を提出した当初に構築した仮説や調査の見通しが、たえず問い直された。2007年度の途中で、高木基金の許可を得て、2008年度も助成研修を継続できることになり、以後、07年度のインタビューをパイロット調査と位置づけて、2008年度に本格調査に入ることにした。

2007年度は、約20名にインタビューを行った。この中には、団体へのインタビューや座談会も含まれている。2007年度の調査地は、東北(山形県)、関東(東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県)、関西(京都府)、東海(静岡県)で、多地点での調査が実施できたが、調査回数は当初予定(約60名)よりも少なく、2008年度に調査が継続できた機会を最大限に活用して、以後、インタビューの回数を大幅に増やしていきたい。また、2007年度には、国内外の先行研究調査も行い、主として欧米で行われた1960 - 70年代の社会運動参加者の「その後」に関する調査研究を多数参照した。

この調査の目的は、三里塚闘争という運動への支援参加経験が、支援経験者自身の生き方(とりわけ政治的態度)に及ぼした様々な影響を調べていくことにある(運動参加経験の再帰的(reflexive)効果に関するモノグラフ的研究)。調査を進める過程で、予期しない情報や出来事や人物に出会い、インタビューは当初の調査設計への問い直しを繰り返しながら進んでいった。

当初、「動き続ける」人々へのインタビューという目的で、三里塚闘争への支援参加をきっかけ(あるいは転機)に、社会運動への関与を持続させていった方々を中心的な話し手に据えていた。しかし、2007年度の調査で、おぼろげながらも明らかになったことは、(インタビューという場において)「この闘争への支援参加経験」と「話し手の現在の主体のあり方」(とりわけ現在のアクティヴィズム)との間には、直線的な因果関係が結ばれることもあれば、両者の間の潜在的な結びつきが暗示されることもある、ということである。両者の結びつき(ときには断絶)を考察する際には、社会運動への持続的関与という話し手の政治的側面だけでなく、話し手の生き方の総体に向き合うことが必要となる。こうした「気づき」は、「動き続ける」(still active)という行為や態度の意味を問い直す過程から生まれた。「動き続ける」といったときの「動き」のあり様は社会運動への持続的関与に限定されないのではないか。個々人に内属した闘争経験は社会運動への継続的(もしくは断続的)参加という以外の手段をもって、持続的に体现されることもあるのではないか。それは例えば、職業選択のような場面に見出される。闘争の支援経験から得た信念と自己の生き方との間に生じる葛藤を調停するために、運動経験者は、どのような生き方を選択してきたのだろうか。就業選択という切り口は、闘争経験の再帰的効果を考察していくうえで重要な視点であり、以後の調査に活かしていく。調査は、こうした問いと応答の繰り返しだった。

三里塚闘争への参加経験から得たスキルや社会的紐帯、特定の信念といった「伝記的経験の資本」(D・ベルトー)は、この闘争に突き動かされていった人々の現在の活動に、どのように活かされているのか。それらはいかにして獲得され、持続し、ときに新たな方向に水路づけられていったのか。こうした運動経験の「再動員」を支える社会的紐帯には、どのようなものがあるのか。社会運動への持続的関与という観点のみでは捉えきれない運動経験の個人的帰結をどのように調査できるのか。一連の問いは、闘争への支援活動という経験が、行為者自身の生き方に及ぼす再帰的な効果を明らかにするための問いであり、2008年度の調査

で明らかにしたいと考えている論点でもある。引き続き、インタビューに歩きながら、調査の現場から問いを立てる力を鍛えていきたい。

インタビューの場において、調査者は、ただ話を聴くだけの受動的な存在ではられない。闘争経験は、調査という介入的な企ての中で、問いを投げ、ときに問いを投げ返される聞き手と話し手との間で、あるいは座談会のような場での話し手相互の対話を通じて、つまり複数の主体間において相互構築的に生み出されるものである。これも、2007年度の調査を通じて、学んだことだった。現在進行形の社会運動事例にアプローチしていく際には、書籍等の文書資料から闘争経験者の語りや見解を受け取るだけでなく、インタビュー調査という企てを通じて、解釈や見解が産出される場自体の生成に携わっていくことも、同時代史や社会運動の研究者に求められる仕事ではないだろうか。未だ調査途上ではあるが、これまでの調査経験から、調査者はそのような考えを持っている。

3. 調査研究・研修の経過

- ・2007年2月（助成内定後） 京都府京都市にて聞き取り 1名、 座談会 1件
- ・2007年4月 山形県鶴岡市にて庄内協同ファーム（旧庄内農民レポート）聞き取り・座談会
- ・2007年8月 神奈川県川崎市にて聞き取り 1名
- ・2007年9月 東京都港区にて聞き取り 1名
日本オーラル・ヒストリー学会年次大会にて研究報告
- ・2007年10月 東京都新宿区にて聞き取り 1名
歴史学研究会近代史部会例会にて研究報告
- ・2007年11月 慶應義塾大学21世紀COE-CCC国際シンポジウムにて研究報告
- ・2008年1月 静岡県静岡市にて聞き取り 1名
- ・2008年3月 千葉県松戸市にて聞き取り 1名
東京都荒川区にて聞き取り 1名
- ・2008年4月 埼玉県さいたま市にて聞き取り 1名
- ・2008年5月 東京都新宿区にて聞き取り 1名
京都府京都市にて聞き取り 2名
NHK成田報道室による取材への協力：高木基金助成研修の概要説明
日仏会館フランス事務所主催シンポジウムにて研究報告

4. 調査研究・研修の成果

2007年度は、日本国内に住む約20名にインタビューを行った。この中には、座談会も含まれている。2007年度の調査地は、東北（山形県）、関東（東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県）、関西（京都府）、東海（静岡県）で、多地点での調査が実施できた。また、調査にご協力いただいた方から、各地に住む支援経験者をご紹介いただく機会にも恵まれた。しかし、聞き取り人数は当初予定（約60名）よりも少ないものとなり、2008年度に調査が継続できた機会を最大限に活用して、以後、インタビューの回数を大幅に増やしていく。

聞き取り以外では、国内外の先行研究のサーベイも行い、国内では1960年-70年代の住民運動と学生運動に関する記録、国外では主として欧米で行われた1960-70年代の社会運動参加者の「その後」に関する調査研究をまとめた数、参照した。

上記の研修の成果を複数の学会・研究会で発表するとともに（詳細は次項を参照）、報告書の作成に向けた聞き取りテープ起こし作業を断続的に実施した。また、研修成果を書籍として出版する計画があり、2008年度内の具体化を目指して、聞き取りを継続していく。

2007年度の調査で、おぼろげながらも明らかになったことは、インタビューという場において「この闘争への支援参加経験」と「話し手の現在の主体のあり方」（とりわけ現在のアクティビズム）との間には、直線的な因果関係が結ばれることもあれば、両者の潜在的な結びつきが暗示されることもある、ということである。両者の結びつき方を考察する際には、社会運動への持続的関与という話し手の政治的側面だけでなく、情緒的表現を恐れずにいえば、話し手の生き方の総体に向き合うインタビューが必要となる。こうした

「気づき」は、インタビューの現場で、「動き続ける」(still active)という行為や態度の意味を問い直す過程から生まれた。

インタビューの場において、調査者は、ただ話を聴くだけの受動的な存在ではられない。これも、調査の現場から学んだことである。闘争経験は、調査という介入的な企ての中で、問いを投げ、ときに問いを投げ返される聞き手と話し手との間で、あるいは座談会のような場での話し手相互の対話を通じて、つまり複数の主体間において相互構築的に生み出される生成的なものでもある。近年の社会運動にアプローチしていく際には、書籍等の文書資料から闘争経験者の語りや見解を受け取るだけでなく、インタビュー調査という企てを通じて、解釈や見解が産出される場自体の生成に携わっていくことも、同時代史や社会運動の研究者に求められる仕事ではないだろうか。

5. 対外的な発表実績

<論文等>

- (1) 相川陽一「三里塚と水俣をむすぶもの」、『ごんずい』100号、水俣病センター相思社、2007年。
- (2) 相川陽一「地域ベ平連の調査から見えてきたもの：資料に出会った者として、何ができるか」、『リズム』第5号、埼玉大学共生社会研究センター、2008年。

<学会・シンポジウムでの研究報告>

- (1) 「支援という経験の語り 『三里塚闘争』参加者への聞き取りから」第5回日本オーラル・ヒストリー学会大会、2007年9月16日、日本女子大学。
- (2) 「地域ベ平連調査からみえてきたもの 文書資料と聞き取りの有機的な連関をめざして」歴史学研究会近代史部会例会、埼玉大学共生社会研究センター、2007年10月21日。
- (3) 「運動参加経験とアクティビズムの持続に関するケーススタディ 『動き続ける人々』に託っての三里塚闘争」第5回慶應義塾大学21世紀COE-CCC国際シンポジウム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」、慶應義塾大学、2007年11月23日。
- (4) 「運動経験の散種 三里塚闘争の支援経験者における“参加の持続”をめぐる」、シンポジウム「集合行為と闘争への関与：日仏比較」主催：日仏会館フランス事務所、協力：IEPI-CRAPUL（ローザンヌ大学）、CRPS（パリ第1大学）、IRISES-パリ第9大学、茨城大学、一橋大学、徳島大学、神奈川大学、2008年5月31日-6月1日。

<その他>

日本放送協会（NHK）成田報道室による成田空港関連取材への協力

取材内容：撮影対象とされたのは主として以下の項目・場面

- ・高木基金の助成研修「支援者にとっての三里塚闘争」の概要説明
- ・研修でのインタビュー風景（東京都内）
- ・成田市内での調査研究・日常活動風景

放映日：2008年5月22日（木）18時台

番組名：NHK総合テレビ「首都圏ネットワーク」

特集タイトル：「成田空港30年 ある若手研究者が探る空港史」

6. 今後の展望

2007年度の助成研修では、研修計画を提出した当初に構築した仮説や調査の見通しが、たえず問い直された。年度当初は、「動き続ける」(still active)人々へのインタビューという当初の目的に沿って、三里塚闘争への支援参加をきっかけ（あるいは転機）に、社会運動への関与を持続させていった方々を中心的な話し手に据えていたが、こうした調査設計自体が、調査の進行とともに変わっていった。このような事情から、2007年度の途中で、次年度への研修継続を希望し、高木基金の許可を得て、2008年度も助成研修を継続

できることになった。

4. の繰り返しになるが、これまでの調査でおぼろげながらも明らかになったことは、インタビューという場において「三里塚闘争への支援参加経験」と「話し手の現在の主体のあり方」（とりわけ現在のアクティビズム）との間には、直線的な因果関係が結ばれることもあれば、両者の潜在的な結びつきが暗示されることもある、ということである。調査が進むにつれて、前者の直線的因果関係を示す語りだけでなく、後者における「結びつき」のあり方を考察していくことにも関心が生じ、以後の調査計画に変更が生じた。その際、社会運動への持続的関与という話し手の政治的側面だけでなく、情緒的表現を恐れずにいえば、話し手の生き方の総体に向き合うインタビューが必要となる。

三里塚闘争への参加経験から得たスキルや社会的紐帯、特定の信念といった「伝記的経験の資本」（D・ベルトー『ライフストーリー』訳本51 - 52頁）は、この闘争に突き動かされていった人々の現在の活動に、どのように活かされているのだろうか。それらはいかにして獲得され、持続し、ときに新たな方向に水路づけられていったのか。こうした運動経験の「再動員」を支える社会的紐帯には、どのようなものがあるのか。一連の問いは、闘争への支援活動という経験が、行為者自身の生き方に及ぼす再帰的な効果を明らかにするための問いであり、2008年度の調査で明らかにしたいと考えている論点でもある。引き続き、インタビューに歩き、調査の現場から問いを立てる力を鍛えていきたい。

複数年度に渡った本研修成果の活かし方としては、引き続き学会・研究会での報告を継続するとともに、論文や書籍の形で成果を発表していきたい。

高木基金へのご意見

7. 完了報告 英文概要

Recipient Name	
Belonging / Contact Address < 公表可能な問い合わせ先・ メールアドレスなど >	
Theme of Research/Training	
Name of the Organization Providing Training < 研修の該当者のみ >	

< 以下の空欄に前記 2 . に対応する内容を英文で記載して下さい。 >

8 . < 高木基金の助成についてのご要望・ご感想など、
忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。 >

< 以上です。ご協力ありがとうございました。 >